

留学を終えて

恵那高等学校 佐藤 岬 (アメリカ合衆国)

アメリカ・ワシントン州での約1年間の生活は常に新しい出来事との出会いの連続の日々であり、苦難や葛藤を克服し自分を精神的に成長させた一年でした。特に最初の1ヶ月は初めて行くシアトルの街だったり、アーリンカンサイズのマクドナルドハンバーガーだったり車の走行車線が右側だったりと見るもの行くところ経験するものすべてが自分にとって未知のもので、ただただ世界の広さや多様さに圧倒されたのを記憶しています。



学校で受けた授業で一番印象に残っているものはEnglish IIIという英語の授業です。アメリカの授業スタイルは日本のものとは違って、大きなテーブルを5、6人で囲み、主に先生の質問に関してはグループ単位で答えを出したり、全員が学校から付与されたタブレットを用いて授業のノートをとったり、課題を提出したりしました。なぜこの授業が一番印象に残っているかというと、今では履修していてよかったなと思っていますが、当時は授業の一つであるプレゼンに対して苦手意識を強く抱いていたからだと思います。私は全員がアメリカ人の教室の前で、片言で下手な英語を話すことにも恐怖心を抱いていました。

その恐怖感を払しょくするためにプレゼンの練習を何度もしたり、見てわかりやすいスライドを作ったりする努力をした結果、本番では片言ではあったと思いますが自分の最大限の力を発揮できて、大きな達成感を感じ、今では自信をもって英語でプレゼンできるようになりました。苦難を克服できた先にはどんな逆境にも諦めずに挑戦してみるという精神性が身に付きました。

私の留学生活は幸運なことにとても素晴らしい人たちに囲まれていたものでした。夫婦で約25年間に渡り世界中から集まる留学生をホストし続けている家族にホストされた自分は、生活の面で何一つ不自由することがなく生活できたり、悩んでいた際には親身になって相談してくれて、まるで僕が実の息子であるかのように接してくれたホストペアレンツには感謝してもしきれません。また同じ年に同じ様にホストされ、ルームシェアをしていたドイツ人の留学生とはサッカーという共通の趣味の下、すぐに意気投合し毎日一緒に学校に行ったり、勉強を教えあったり、サッカーの練習をしたり、日本食をふるまつたり、ドイツ料理をふるまつもらったりと、男兄弟がいない僕にとっては真の兄弟のような存在を見つけることができ、今でも彼とは連絡を取ることが多いです。僕の留学生活は苦しくて悩むこともありましたが、1年を通して困難や不安を克服して自信がつき精神的に成長することができ、また人との出会いの尊さや周りの人間への感謝の気持ちをよく知ることができた1年間でした。この1年間は絶対に僕の今後の人生をうまく導くものとなると思います。